空中写真判読実習レポートの書き方

2025年7月8日

担当：内田臣一

１．レポートの体裁

タイトルは16ポイント程度の大きさで中央にそろえる。氏名、本文など、その他の文字は10ポイント程度の文字を使用する。班番号、学籍番号、氏名は、記述例のように右にそろえる。フォント（書体）は明朝体（MS明朝など）を基本とするが、章のタイトルなど強調したい部分にはゴシック体（MSゴシックなど）を用いてもよい。A4版2頁、両面印刷で1枚（片面印刷2枚は不可）にまとめる。数字やアルファベットは、半角文字を使う。本文は読みやすくするため、必ず数行～10行程度の段落に分けて書く。段落の最初の行の左端は、この文章と同様に、1文字分右へ下げる。

執筆の際は、このファイル、あるいはレポート記述例のファイルに上書きして書く。すでに別の文書ファイルに書いてある場合でも、通常の貼り付けでなく、テキスト形式を選択して貼り付ければ、そのファイルの書式に自動的に直される。

２．レポートに書くべき内容

　愛工大周辺で自分が選んだ場所（直線で150 mの区間）を授業で配布した1:2,500地形図（A4版4枚、1枚目は瀬戸市・2～4枚目は豊田市）に図示する（記述例 図1）。その場所の現況の写真を少なくとも1枚示し（記述例 図2）、1:2,500地形図中にその撮影位置と方向を示す。次に、その150 m区間について、1:2,500地形図を用いて、横井先生の実習で教わった方法で断面図を描く。方眼紙を用いて、平面は1/1,000、標高は1/400で描く（記述例 図3下）。また、2025年現在の植生や土地利用（あるいは地形の詳細）も自分で現地に行って観察し、断面図に加えて示す。

さらに、授業で配布した1948, 1965, 1970, 1977, 1987, 2004, 2007年撮影の空中写真を、その場所が写っている限りすべて実体視して、その150 m区間の模式的な断面図を少なくとも3回撮影分（1948年撮影の写真は必ず使う）について描き、地形と植生・土地利用の様子を模式的に示す。すなわち、少なくとも4つの年（1948年と2025年は必ず入れる）の断面図を上下に並べて示す。現在と同じ地形と考えられる部分については、地形図から作った断面をそのまま使う。そして、その断面図を引用して、その場所の地形と植生・土地利用の変化を文章で説明する。

　写真・図にはタイトルをつけ、写真・図の面積は印字領域の1/2までにとどめる。写真はデータをワープロのファイルに挿入して組み入れる（記述例 図2）。同様に図についても、配布した1:2,500地形図と手書きの図をスキャンして取り込んで（コンビニのコピー機などでUSBメモリーに保存、あるいはスマートフォンの無料アプリ「Adobe Scan」を利用）、そのデータを組み入れる（記述例 図1、図3）。スマートフォンで撮影しただけの、ゆがんだ不鮮明な写真を使ってはならない。写真・地図はトリミングして必要な部分だけを切り取って使う。写真・地図の縦横の長さの元の比率を変えてはならない。

３．書籍やインターネットなどからデータを収集した際の注意

説明には、記述例のように、書籍やインターネットの記事を参考にした記述を加えてもよい。ただし、書籍やインターネットの記事を参考にするときは、著作権の侵害をしてはならない。すなわち、丸写しするのではなく、自分自身のことばに直して書き、書籍やインターネットからの情報であることがはっきりわかるように記述する。文末には、記述例のように参考資料として引用元を列記する（インターネットの場合は日付を記載）。